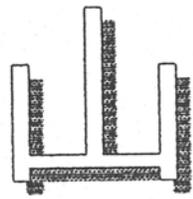


武神館 伝書



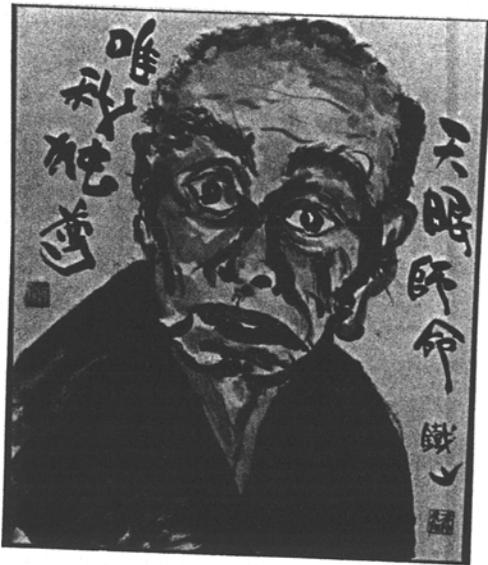
さんみやく



第一卷 第二号



平成五年 六月九日発行



宗家一画

たかまつとしつぐ
高松壽司 冊

生年
45

宗家口伝

体術の流れが健康に流れている時、神経繊維にも同じく命の語りが続けられて行く。それがロゴスの語りともなり、神伝口伝の境地を歩むことができるのである。

高松先生はスピッツ（犬の種類）二十匹に引いて引かれて、毎日散歩をなさっていた。かく云う私も、犬五匹に引かれながら犬を導き歩んでいる。

武神館道場の歩みも、昨年（1992年）のポルトガル大会から、スペインの武友たちの健康なコミュニティを見ることができた。これも、大会を主催したエルナニさんが持つ武道家の心がそうさせたのであろう。

今年のウエルバの大会では、円卓の騎士に倣って士道師が集い、杯を交わすことが出来たのである。この大会を主催したのが、アンドレ・ボンセ君である。この大会を成功させたのも、アンドレ君の武道家の心であることを、彼の心から湧き出るダイヤの涙が証明したのである。

これからのスペインの武神館は、正義の騎士の他は存在させない!! とボンセ君は言う。スペイン語では、子供のことをニーニョーと言う。子供は美しく可愛い、いとしいものだと言う。そしてニーニョーとニンジャの音の流れには、ハーモニーがあると語る。

大会のパーティーの演武は、イシドロ君が企画・演出・出演したもので、その出来映えは、私が十二年間の外遊中に見たものなかでは、最高であった。演武終了とともに、イシドロ君の目にも、照明に映えた美しい宝石を見ることができた。

武道を修行する諸君に申し上げる。武道家の心がなかったら、武道を止めなさい、と!! 私が何十年も指導した過程から得たものは、高松先生の一言一言によって証明されているからである。

武道は教わるものではない。自分の努力と忍耐から始まるもので、それに気付かなかつたら、何十年修行しても何段になっても、武道家としての価値観を失するものなのである。十段になってもその自覚のない者は無段無級に等しい、これが武神館の段位の真剣型なのである。

武道家の本質をわきまえず、折角私の門を叩きながら、私の教えも馬耳東風、武道家の心を求めず—— そうそう、ここで武道花と書こう。諸君が求める花性竹性と云う悟りの一つのパズルの解明としておこう。

さて、ヒューマンサイエンスの博士として、格闘技を求める者が知らず識らずに罹りやすい病、その症状・その形態について分析しよう。

1 ナンバーワン型

段にこだわり、いつも「俺はナンバーワン」でいたがる、自己中心の発育不全型。

これはひどいものです。自分が下手なのもわからず、自分が殺されても自覚しない困ったタイプである。

2 ビジネス型

武道で生活しようとする発想からそうなるもので、武道家の心を忘れて、商人の心に転化してしまう型。

弟子を多く持っている者が偉いと思うようになってたり、弟子が逃げ出すとお金を落としたような気になったりする。そして、自分が武道家として駄目な人間だと云うことに気付かないのである。

こういうタイプには、武術・武芸の達人は出ないと、私の経験からはっきり言っておこう。

3 レポーター型

私のところへ来ても、稽古より取材を大事にして、写真を撮ったりメモを取ったりする。そして国へ帰ってそれを売り込む。

これがいかんのですね。武道を、型だとかこれが正しいとか悪いとか、そんな素人の考えでしか観ることができなくなってしまっている。そして自分がそんな状態に陥っていることにも、気付かずじまいで終わってしまうのですね。

まだまだ型には沢山あります。先生師範型、ムード派型、コレクター型、暴力型、動物型、宗教型、思想型……。

これらの型を透明にした場所から観たところに、武道の存在があるのだと云うことを知ることである。

透明な、美しく自然に流れる神伝不動流からスタートし、修行なさったのが

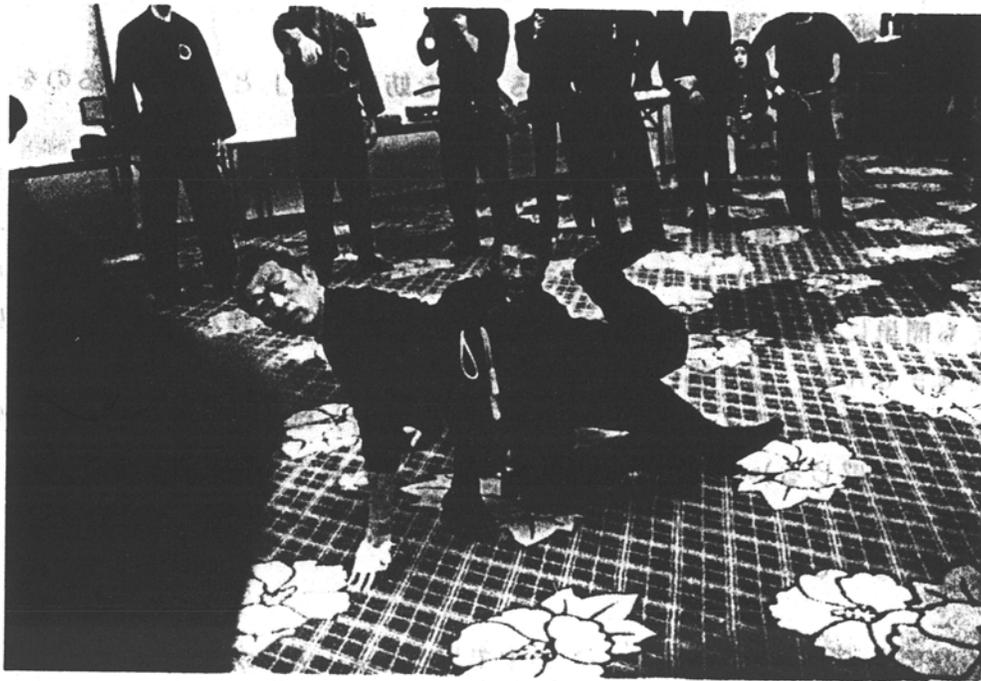
高松先生の武風の流れでした。私は、空間に流れる見えない光の流れを追って、高松先生の武風の門を叩いたのがスタートでした。云うなれば、高松先生と私の出会いは、信州戸隠山の岩戸開きの故事に似たものがあったのです。

昨今まで、武神館を忍術オンリーと捕らえ、忍術をキャッチフレーズにする傾向がありましたが、そろそろ武神館の大きさを自覚しましょう。

武神館の武道は、三千年の歴史を持つ九流派の武風の流れであるということで、諸君はスペースシャトルに乗った武道家としての自覚を忘れず、稽古に専念・一貫してください。

ここで専念の音を千年と聞いてください。巻物にはよく見受けられる、「千日の過行があれば自ずから術生ずる」と云うことから、空間に通ずる音を聞くことができると思います。

一貫^{いっかん}もまた一飲^{いっかん}と書けば、音が伝達され一つの飲^{よろこび}美が、健康が、幸福が発見できるものなのです。



1993年ウエルバ大会（スペイン）

バランスの点 — 精神・肉体・頭脳の間人間

ウエルバ市（スペイン）で行われた大会の、一つの出来事を私なりに述べるように初見先生からいわれたときに、疑問に思いました。「紙の上ではどうやってフィーリング（感覚）を表現するか？」。武神館の門人であるかないか関係なしに、ほかの人達がこのポイントを掴むことが大事であると思っていますので、私は自分を分析し、この「空間」であのフィーリングを伝えようと思います。

動きの本質はベストを尽くそうとするときにはとても掴みにくいものです。このフィーリングを掴もうとするとき、ゼロ・ポイントが役立ちます——私達の時間と空間と一緒に作動します。

初見先生が常に「知識は人間であることを妨げます」とおっしゃるのを、私は忘れられません。これは正に真実です。

私達の人生の中で新しいことを見つけるときや新しい状況におかれるときに、あまりにも知識（頭脳の点）で分析しようとするとき己を妨げますが、感じようとして精神（心の点）と一つに成ろうとすれば、二つの間に踊りが出来上がり、とても簡単に理解できます。これは、人生や生命の不思議な部分は知識では理解できませんが、心で感じることはできるからです。

この証拠は、私達（ウエルバ大会に参加した皆）はウエルバ大会の稽古の間に見る（＝感じる）ことができたことです。これは一つだけではなく、稽古のすべての面においてできたのですが、時々特に顕著でした（心眼でみるときはいつもそうでした）。

具体的に出来事は棒術のシーンの中で起こりました。先生は棒の技を通して虚空の意味を説明しようとしていました。

「棒は投げるために使えます」と先生がいい、棒を片手に野口さんをその先で

狙っていました。そして時間および空間を越えた動きで、（二つの間に差もなく）……そして簡単ながら洗練された動きで、棒はその一瞬を野口さんへ浮いて行くように送られ、彼は自分のみならず、初見先生とも調和した動きで、初見先生に投げられた棒を自然な空間に送りました。

私はこの紙の上でこれ以上書きたくありません。それよりも、私のすべてのエネルギーは、これを読む人々が肉体・頭脳・精神の間にある我々の自然な繋がり、三つの部分——というより調和した踊りの単なる一部のようなもの——、を理解できるように当てようと思います。「我々の目は空にあるが足は地面に固定している」、これがもしかしたらバランスの法なのかもしれません。

先生はいつも「行と行の間を読むこと」が大事だといっていますが、以上の短い言葉が行と行との間に大きな空間を作って、武神館道場の心をそこに持っていければ幸いです。



ペドロ・フレイタス・ゴンザレス
士道師 カナリアス諸島、スペイン

武友ゴリラ君から宗家への便り

鐵山様

前略

ウエルバ大会はとてもよかったです。稽古は素晴らしくて、フィーリングは美しかったです。スペインの士道師は日毎の一つになっていますが、これは貴方の武道がこの国で大きく改善に向かっている一つの原因だと思います。

武道は今私の人生の基本です。歴史、心理学、哲学、動物、自然、そして宇宙を勉強しています。私の体術は実戦においても自身を持てるレベルに到達したと思っていますが、今後は何年も（何十年も）の稽古で上達して、あなたが

くださった段位に足るようになるという意味で、リラックスしなければなりません。

あなたの言葉を何回も聞き、あなたが英語で出版したものをほとんどすべて読み、あなたと交流し、その中から私はあなたの道、忍者の道が正しい道であり、人生を理解し、活かし、楽しむ道であると思います。私もいつの日か戸隠流の忍者であることの大きな名誉を得られたら幸いです。人は様々、皆違うことを求めています。私は短くても充実した半生を送ってきて、自分の目的は本当の幸福であると分かりました。

私は誠実な人間なので、自分の周りにあるものが幸福でない限り、自分も幸福になれません。でも幸福は外に頼って来るものではなく、人を助けたり、面倒を看たり、愛したりすると私の外と平和になれます。自分達の利しか考えない人の残酷さや無知、エゴなどから自分を守れない動物や自然、人間を守ることが正しいと信じています。私が攻撃的な人間であるということは事実ですが、暴力は嫌いで、私が人を痛めたり殺したりする必要がないように、神様にお祈りしています。

先生、私は多分バリ大会にも行きます。私の状況は少しずつ、確実によくなってきています。病気は時々耐え難いのですが、絶望的になると二時間散歩に出て、映画を観て、暖かい風呂に入ります。コンピュータはもう問題にしません。（今はとりあえず）お酒は飲みません。熟睡します。きっと元のエネルギーを取り戻すのは、時間の問題だけでしょう。そして地獄で生きた経験から色々学び、最終的に積極的な体験になると思います。

近いうちにお会いしましょう。



草々

リカルド・（ゴリラ） スペイン



黄金の瞬間

武神館霞庵主 スティーヴ・ヘイズ

歴史に名を残した日本の著名な武道の名人達にとって、何がそしてまたいつがその大事な転機となったかという話は、私たち外国人にとって非常に興味をそそられ、このような話題には神経を集中させ、耳をそばだてて聞き、またその話を得意気に他へ伝えたりする。

こうした伝説の地位にまで格上げされた名人達の「転機」は、往々にして、新しくその武道の道に足を踏み入れた人の心の中に、自分もその黄金の時代に生きていたかったという熱烈な思いを生み出すことになる。今という時間が、光り輝く過去と比べると色彩を失ってしまったかのように思える。黄金の瞬間に居合わせた過去の人達は、絶え間なく続く時間の流れの中で、将来その武道にかかわる人が、自分達のことを羨望の目で見るなどとは思ってしなかったであろう。

私は初見先生の忍法武芸のこうした光り輝く瞬間に居合わせたことを、今でも宝の如く思っています。1982年、先生が日本を初めて離れた旅の間に、私は先生から武道における畏^{かしこ}しい教訓を与えられました。その夏のオハイオの森の中で起きた数秒の出来事は、私の武道の心髄の理解度を数百倍にも膨れ上がらせたものだったのです。

日本での修行中、私は忍者の九字切りや、九字印といった秘法的なパワーについて、初見先生に熱心に質問を続けました。私の知識不足から生じた結果ではありましたが、このミステリアスな九字に対する私の思いは深まるばかりでした。私の知っている限りでは、この九字のパワーは忍者が使ったものであったのですが、私にはその使い方が全く判りませんでした。

1970年代に、野田の道場で修行していたアメリカ人は私だけだったので、この九字について知らないのは外国人の自分一人ではないかという不安もありました。私はこの武道を通じて、生き方を考えてみたいと思っていたので、ただの忍術学識者ではなく真の意味の弟子になるのであれば、この武道のすべてを知らなければならないと思っていたのです。

練習が終わり、皆が帰った後も私は一人残り、先生に闘魂の微妙な点についてしつこく質問したりしました。先生は私の質問に辛抱強く答えて下さいまし

たが、私の心の中にはいつも、この九字のパワーをいかにして経験するのか見当もつかないのは、結局、道場の中で自分一人じゃないのかという思いがくすぶっていました。

1982年の忍者祭は、野田市から何千マイルも離れたオハイオ州の森の中で行われました。九字に対する質問は避け難いもので、初見先生を取り巻く質疑応答の中で出て来ました。まだ前方回転も出来ない、構えもなっていない生徒達がこの九字に対する質問をしたのです。

私の九字に対する思いを遂げさせるために、先生は突然私の方を振り返り、いつでもいいから突いて来るように命じられました。先生は多分、その時の私の顔に浮かんでいた驚きを感じ取られて、笑って、何が起ころうとも責任は自分が持つからと言われました。そして再度、後ろから突いて来るように命じられました。そして、先生は生徒の方へ向き直り、話を続けられました。

私は先生の頭をめがけてフルスピードで右のパンチを放ちました。先生は会話を中断されることもなく、二、三センチ頭を動かされ、私のはなったパンチは宙に抜けました。しかし、パンチが見えたはずもないし、聞こえたはずもないのです。

先生の行為は非常に早くしかも自然であったので、多くの人が何が起きたのか気付かない様子でした。しかし、何人かの生徒は目の前で演じられた驚くべきパワーに、一瞬、その場だけ時間が止まってしまったかのような感覚を覚えていました。私は、後ろを振り返った先生の、「これが九字だよ」という言葉で我に返った自分を見い出していました。

今日の前で起きたことを、実際に自分の目で見た証人であるにもかかわらず、信じられない思いがありました。これをトリックだとか、前もってリハーサルが行われていたと思っている生徒もいましたし、驚いて、これは殺気のデモンストレーションでしょうと答えた人もいました。

先生は、「殺気じゃないよ」と答えられ、その時私は一瞬目の前が明るくなったのを感じました。私は、自分の先生を傷付けよう、殺してやろうなどは微塵も思っていなかったからです。

とは言っても、パンチ自体は危険で強力なものであったので、もし当たっていたら大変なことになっていたでしょう。宗家は感じられないものを感じ、それを避けて、衝撃を免れたのです。それだけでもかなり印象的なものでした。

しかし、もう少し掘り下げてみると、このことが持つインパクトは、九百年の歴史を持つ武神館忍法のトライアムフ（勝利）であったように思います。

もし私のフルスピードのパンチが先生の頭に当たっていたならば、九百年の歴史は永久に消え去ってしまったことでしょう。初見先生の継承する九つの流派が本物であり、現在、未来に向かい続けるのであれば、こうした公の場所でのテストで失敗することは許されません。

忍術の宗家が弟子に後ろから突いて来るように命じたが、結局避けられなくて、啞然として棒立ちになっている弟子の足下で無意識になっている、という場面を想像してみてください。宗家は、残酷なあざけりと嘲笑の中で、二度と公の前に出ることはできないでしょう。また、その宗家の下で教えている師範も、こうした恥ずかしい事実が周知となった時点で、自身を持って教えることが出来なくなるでしょう。

過去に生きたすべての宗家の魂が寄り集まり、今、宗家の称号を持つ先生の後ろに立っているかのように思えます。宗家自身もいかにして切り抜けたか説明に困るようなこうした危機を、武神が救って来たのでしょうか。それが、もう十年以上も前になってしまったその日に、初見先生が私に授けられた秘法的な九字のパワーが持つ、究極的なものであったのかもしれない。

その光り輝く「真実の瞬間」は、もう十年以上も前に起こりました。その時に先生の武芸を目の当たりに見た人はほんの一握りでした。そして、今この現在、何千人、何万人という人が、初見先生と個人的な時間を過ごせたらと願っています。

この武道の絶え間ない時間の流れの中で、私は一つの真の黄金の瞬間の場に居合わせたことを思う時、なにかしら郷愁の念にかられます。

私が疑い深い生徒であったのも何か理由があつてのことで、このことが原因で先生は大きな賭けをして下さいました。そう考えると、私と先生の間は、何か業のようなもので結ばれていると思われれます。

先生が私に残して下さった最高のギフトを、人生の宝にしたいと思います。

スポーツ武道の功罪

武神館道場 師範 長登敏朗 猛虎

いわゆる古武道一般とも一線を画し、あくまで、それ本来の本質を追求する武道と、現代武道と言われているスポーツ武道との相違を、私が現在まで修行してきて得た所見を、レポート風にまとめてみようと思う。そのことでスポーツ武道の弱点を認識し、新たに武道というものを再考してもらえれば嬉しく思う。

便宜上本物の武道は単に武道とする。あえて武道という語を使うが、「武術」でも「武芸」でも、ここでは同義とする。本来は非常に大事なテーマであるが、平和な現在の格闘技者は、そういうことを考えてみようという閃きすらない。

私自身、かつて柔道かであった。それが最高の武道の一つであると思っていたし、日本伝統の国技であると信じ、小学五年生から大学四年生まで修行し、渡米して三年間教師をしていた時がある。

その当時（大学生時代）は他の格闘技のことなどぜんぜん念頭にないし、歯牙にも掛けないという、いふなれば閉鎖的で保守的、よくいえば平和的な、日本人一般の代名詞のような者であったと思う。と同時に体育会系でもあった。実際にはアメリカにいて初めて柔道は武道ではないことにはっきり気づき、修行のし直しを決意したわけである。

柔道は今日世界的になり、本家本元の日本もそう簡単には勝てなくなってしまう。残念なことであるが、日本の柔道が世界で愛され、国際的に、スポーツ文化交流の役割をはたし、人類の平和に貢献していることを考えれば、大変結構であると言わざるを得ない。

外から拝見していると、国内的には派閥や、国際的には組織的な問題等で苦労されている様子だが、選手諸君には、そんなことは気にせず一生懸命修行に励んでいただきたいものである。

現在柔道を修行中の人の中には、柔道は武道であると思っている人はほとんどいないと思うが、正しくは柔道はスポーツであり、本当の武道とは区別する

必要がある。他のスポーツ、レスリングやボクシングと同様、格闘のために技を練り、強い心と身体を鍛え得る最高のスポーツの一つである。日本古来の柔術がその基になっているが、しかしオリンピック競技にあるとおり、現在は柔術とは何の関係もない。

真剣型（実戦型）の稽古をすれば判るが、柔道の受身はマットとかたたみの上とか、平らな場所では有効であるが、実戦の場合、外であの受身では、手や足や身体を痛める。要するにスポーツの受身なのである（ところが合気道や空手道、レスリングなどでも同じような受身をとる）。

受身の本当の意味を判っている人は少ないと思う。私がアメリカにいる頃、グリーンベレー出身（ベトナム帰り）の友人に柔道をコーチしたことがある。

どうしたかというと、普段着のまま（もちろん靴も履いたまま）、水の中とか、泥の上とか、ジャリの上とか、そういう自然の場所での訓練を、むしろ彼の希望で行った。

いま、水泳でもズボン・シャツのまま泳がせることの重要性に気付き、そういう指導をしている。それと同じで、実戦に役立つ訓練も必要なのである。

今の柔道家は、護身術すらしない。柔道には当て身技、蹴り技がないし、それに対応する練習もしない。柔道家は「さばく」という語を使うが、あれはスポーツ的なさばき技で、実際に相手が殴ってきたり、突いてきたり、蹴ってきたときの真剣型のさばきとは、全然違う。

要するに足で、体でさばくのであるが、柔道では逆に足が根っ子のように張り付いてしまっていて動かない。身体も動かないから、刃物・武器等に対しては非常に危険である。

柔術と柔道の違いはいっぱいあるが、凡そ武道において、格闘技としての柔道の弱点をいわせてもらえば、競技の勝ち負けを大事にし、競技試合の練習しかない（武道としての稽古はしない）。また、勝ったからといって、本当に強いのだと思わせてしまっている。まあしょうがないといえはいえるが、これにはとんでもない間違いを起こさせる危険性が含まれている。ルール競技の中の勝負は、ルールのない世界では通用しないということを認識していただきたいと思う。

嘉納先生^{*2}（柔道の創始者）は、「柔道を修業したら、柔術の修業もしなさい」

と言いつ残されているとか、柔道はあくまで体育であり、スポーツであり、「柔術とは違ふのだよ」とおっしゃられていたと思う。もしそうだとしたら、柔道を武術としても残されたかつたその真意はいかに、先生ご本人が一番柔道の弱点を知り、そのために柔術もあわせて修業しなさいといわれたものと想像する。

そのお気持ちを、お弟子さんたちは知るか知らずか、その遺志を嗣ぐものはいない。高段者（高齢者）になってから、極の型、古式の型等の練習、わけもわからず、ただ昇段のためだけの型にどんな意味があるのか。

もっともっと身体も頭も柔軟なうちに、せめて護身術も、スポーツ柔道と併せて教えられるのになと思うが（特にこれからは必要）、教えることのできる人がいないのが現状であろう。

このことは柔道に限らず、大多数のスポーツ武道は大同小異、終身雇用制、年功序列型の社会の仕組みの中で訓練し、訓練され、武道もスポーツもごちゃ混ぜにしてしまつて、何がなんなのか完全にわからなくなつてしまつている。

スポーツ武道を、スポーツとして解つてやっている人はいい。中には、「今の時代、武道はスポーツでいいじゃないか」という人もいる。バカな話である。

現在の修業者は、一つのことだけを真面目に一生続ける。他のスポーツ武道ほとんど応用がきかない。それでも一生懸けて深く追求し「極める」という。

一般に、技術者、芸術家の世界と共通性はあるのだが、しかし武道に関していえば、それは本来総合的なものであり、一つだけの応用性のない訓練では十分ではない。

シンプルに武道は戦いである。一つの事、それだけの修業で本当の武道が解つたつもりになつている人もいる。思い違いもはなはだしい（一つの事——例えば剣道、弓道、柔道、空手道、居合道、合気道など——をそれだけ一生懸けて訓練しても、私は彼らを武道家とはいわない）。

それだけしか知らないで、どうやって闘うというのか、不安感はないのか、不思議な話である。完全に平和ボケしてしまつている（中には闘わない武道もある）。

さらに歴史的に、武道においては、スポーツ的な勝ち負けは大した意味はなく、殺すか殺されるか、生か死かを重要視した。そこにはルールはなく、反則技も、体重制限も、男女差も、時間制限も、場所の制限も、人数制限も、道具（武器）の制限もなかつた。モラルの制限さえなかつた。仮に、歴史的な武道

家と闘わなければならないとして、反対にルールを作り、安全のためのあらゆる制限をつけた現代武道家が、どうやって戦うのか。戦いの本質を知らない武道がまかりとおる時代である。

四、五歳の子供でもわかる理屈に、道だ、心だと自分でもわからない難しい抽象的な理論を付けて、ごまかしたりごまかされたり。思考力も退化し、柔軟性も失った頭で、相手に応じて変化などできるものではない。

決まったウクの中で訓練し、その中でしか競技しない。そこでは弱体者やスローな者は、絶対に勝者になれない。断言できる。それがスポーツであり、また勝者もいずれ早い時期に引退する。三十歳代が限界であろう。

長寿社会の現在、三十歳は社会的にはまだまだ若造でしかない。中には、年齢的な体力の限界まで訓練し続ける。衰れというしかない。

スポーツでは体力の限界が精神力の限界なのであり、その後は競技に出る気力は急速に衰える。そう考えると、体力の限界を感じる前に止めた方が利口であろう。スポーツは健康に悪いという説もある。

中には、一つのスポーツ武道をやって物足りなくなったり、一つでは武道として不十分だと気付いたりして、他のスポーツ武道をやる人もいる。だが、現代のスポーツ武道は、型にこだわりすぎ、まず形から入る。しかし最初にやったものの動きのくせがいつまでもとれないから、後でやるものはなかなか様にならない。結局、他のものやっても、苦勞するだけで實がない。だからそれぞれ一つの事の専門になってしまう。

以前宗家のお供で、FBIアカデミーに講演にいったとき、彼等は、はっきりスポーツ武道はやらないと言っていた。なぜならば、それをする事で逆に頭や身体が硬くなり、危険であると判断したからだそうだ。実戦の多い場所で戦うプロの彼等は、現代武道は役に立たないと見た、むしろ習わない方がいいと思っている。

スポーツ武道は、体力や根性はつくが、もっと大事なものを忘れ去ってしまった。それを彼等の優秀な頭脳とプロの坎で見透かされてしまっている。

最初、武道は一つのものであり、総合的なものであった。^{*4}それがいつしかそれぞれの専門的なものになり、長い時間を経るに従い、一環性も失い、最初のものとは似ても似付かない姿に変わって、ついには現在のスポーツ武道の形に

なっている。

さらにいえば、一つの事を一生続けてやるから、武道ということに関しては、狭視的になってしまう。現代武道は、結局それしかできない。もっと強力なものに対したとき、そういう思考回路が最初からないのだからどうしようもない。本来、そういうことを考えるのも武道なのであるが。

そういうスポーツ武道家と話してみると、彼等はそれぞれの専門では素晴らしいものを持っている。がしかし、専門外に関しては無知に等しく、惜しむべきかなそれしかできないという。

平和な時代の武道の形にとらわれて、それを伝統として守り続ける。彼等にとって、その伝統を守るといふ、行為そのものが大事なことである。だが、伝統を守るための武道とは主客転倒、本来の意義からはさうとう外れた方向に向いている。もっとも、だからこそスポーツ武道として生存権を得ているのかも知れない。

それしかできないという意識と、我々のようになんでもできるという意識の差は、限りなく大きい。

もう時効としてエピソードを話すが、一九六〇年代後半、私の学生時代は、あの安保闘争の余韻の残る、まだまだ世相穏やかならざりし過激な時で、学生達は自己の思想のもと、正義感に燃え国を思い、じっとしておられず、世の不正とたたかうという激しい時代であった。我が大学でもご多分に漏れず、全学連などと称する学生が、バリケードで校舎を封鎖した。授業ができず、休講に追い込まれたとき、思わず私は仲間と三人で彼等の角材を奪い取り、殴り合いをしていた。

多数の、角材と鉄パイプ、ヘルメット、覆面で武装した彼等に対し、柔道で相手をなげ倒すなどという発想は最初から頭になかったのだろう、本能的に武器を奪い取り戦っていた。気が付くと仲間は逃げ私一人、多勢に無勢、危険を感じ私も逃げだしたわけであったが、このできごとも、私に対し本物の武道への啓示というか、何かが働いていたのだと今にして思うのである。

この時の過激学生の半数以上は、他大学の名前入りのヘルメットを被っていた。この他大学の学生と、バリケードに対し、私は怒ったのであった。恥ずかしい思い出である。

大事なものを守る為にたたかう、しかし争いを好むものではない。どうしてもあそいを避けられない場合がある。しかたなく戦う。

宗家は「生きる」ということを考えろと教えられている。スポーツ的な勝負にあまりにもこだわりすぎる。負けるが勝ちということもある。勝ち負けを離れたところから本当の武道が始まる。相手も生き、自分も生きる、そのためにも本物の武道の修業を続ける。

どんなに時代が変わろうと武道は武道、乱世でも平和時でも真理は変わらない。スポーツ武道、高校でいえば一科目、大学ならば四単位、それだけの訓練で卒業証書はない。現代武道、一生やっても本当の道は発見できないであろう。

形やしきたりにこだわらず、体制にもおもねらず、その時代時代に応じて、変化して生き抜いてきた「生命体」、生きている本物の武道がこの国に厳然と生存している。日本だけが特に素晴らしいというわけではないのだが、日本という国の位置の特殊性と、民族の体質により、他の国とは多少違った道をたどり、現在にいたっている。

せつかくこの世に生を得、武道を志しながら、真の武道に縁のない人は気の毒である。

武道—— もしかしたら、選ばれた者だけが、それに触れる資格を有するのかもしれない。

----- 編集部 余話 -----



* 1 「武芸」「武術」「武道」

例えば明代の初め（十四世紀後半）に成立したといわれる「水滸伝」に、早くも「武芸十八般」の語が見られるとおり、武芸・武術という言葉は、古くから中国でも使われていた。

「武芸」と「武術」の定義の分け方は、日本では曖昧になっているが、古く中国では、「武芸」と言った場合は、剣・槍・鎗・矛・斧・戟・鉞・弓・弩などの武器を使う方法を意味し、「武術」と言う場合は、泳法や馬術などを含め（身体で覚える）「戦いに必要な技術」全般を意味したものと考えられる。

一方「武道」という語は、古くは「武士道」とほぼ同義に使われていたらしい。「武道」が武技・武術を意味するようになるのは、江戸時代に入って、武芸の中でも精神的な部分が重んじられるようになり、禅宗や密教や儒教などの哲学を取り入れるようになってからである（古くは、日本の武芸の精神的バックには、「六韜・三略」に代表されるように、道教的思想もあった。例えば柔術の代名詞「柔能制剛」の語は、「三略」に基づいている）

そして、長登師範が「現代武道」「スポーツ武道」と呼んでいる剣道・柔道・合気道・空手道・弓道・居合道などの「武道」は、ほとんど明治維新後に成立したものである。

ただし「柔道」という語は、松江藩に定着した起倒流が、十七世紀後半にすでに「直信流柔道」として使っている。起倒流中興の祖である寺田勘右衛門正重は、林春道に儒学を、沢庵禅師に禅理を学んでいる。この新しい思想を自らの武芸に積極的に取り入れて、「道」と称したのであろう。

* 2 嘉納治五郎 (かのうじごろう 1860~1938)

明治時代の教育家、講道館柔道の創始者。1860年、灘の酒造家嘉納作次郎の三男として、摂津国(兵庫県)御影村(神戸市東灘区御影町)に生まれる。明治四年(1871年)に上京し、翌明治五年に開成学校(東大)に入学、明治十四年(1881年)に東京大学文学部政治学科及び理財学科を卒業し、翌明治十五年に哲学科選科を卒業した。

学業の傍ら、福田八之助に師事して天神真楊流柔術を学び、同師の死後は磯正智について学ぶ。また、飯久保恆年について起倒流柔術を学び、さらに柔術の体育的側面に注目して、諸流の師範に積極的に教えを求めた。

東大卒業後、学習院講師、同教授、同教頭、第五高等中学校校長、第一高等中学校校長、文部省普通学務局長、東京高等師範学校校長などを歴任。

学習院の講師時代、柔術に体育的・精神的・技術的工夫を加えた心身の鍛錬法を考案し、これを講道館柔道と唱えて、東京下谷稲荷町の永昌寺に嘉納塾講道館を開き、門下生に学業を教える傍ら、柔道の指導も行っていた。

明治二十一年(1888年)、東京九段の富士見町道場で、柔術諸流を統合して体育的に再構成した、講道館柔道を完成した。

以後、この普及と指導は終生の事業となり、明治二十一年以来十二回に及ぶ外遊を通して、日本文化の一つとして絶えず外国に紹介し続けた。

また、明治四十二年(1909年)には、クーベルタンの勧めで日本人初の国際オリンピック委員となり、明治四十四年には日本体育協会を設立してその初代会長となり、さらに翌四十五年にはストックホルムで開かれたオリンピックに日本選手団長として参加している。

その後、オリンピックの日本誘致に奔走し、昭和十一年(1936年)にベルリンで開催された国際オリンピック委員会総会に出席して、第十二回大会の東京開催を獲得した。昭和十三年には、カイロで開催された同委員総会に出席して、第十三回大会の冬季競技も札幌に招致することに成功した。だがその帰路、氷川丸の船上でにわか急性肺炎を患い、太平洋上で没した。

* 3 「柔道は柔術とは違うのだよ」

嘉納治五郎は、柔術の持つ教育的・体育的側面に注目し、柔術の持つ武技としての危険な部分を巧妙に削除し、新時代の体育競技(スポーツ)に再編したものを「講道館柔道」と呼んだらしい。

基本的に彼は教育者であり、柔道の目的もあくまでも体育・徳育であった。それは嘉納が講道館柔道の理念として唱えた「精力最善活用」「自他共栄(精力善用自他共栄)、あるいは彼が柔道を指導する際の目標とした「体育・勝負・修身」などからも明かである。

嘉納は常に、講道館柔道を「柔術を近代化したスポーツ」と位置付けて普及させようとしていたので、彼の生前は、柔道が武芸と見誤られることはほとんどなかったようである。だが彼の死後、台頭しつつあった軍国主義の中で、柔道が軍事教練の一部に取り入れられると、次第に武術と誤解されるようになったらしい。

さらに、富田常雄が昭和十七年に「姿三四郎」を発表し、それが大好評を得るに及んで、多くの人が講道館柔道を武芸だと誤解してしまったものと思われる。

武芸とスポーツの差をわきまえない、一部の後継者たちの姿を見たら、泉下の嘉納翁の苦悩は如何ばかりかと嘆じるのは、長登師範一人ではないだろう。

二水也 明治四十一年に全刊の水在起倒流柔術の記録である

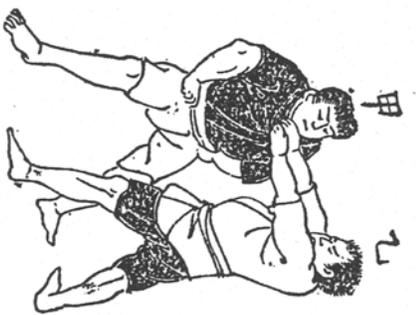
雪 <small>ゆき</small> 身 <small>み</small>	鍛 <small>たが</small> 曳 <small>ひ</small> 体 <small>たい</small>	車 <small>くるま</small> 拳 <small>こぶし</small>
折 <small>ひ</small> 碎 <small>くだ</small>	取 <small>と</small> 落 <small>お</small>	入 <small>い</small> 流 <small>りゅう</small>
岩 <small>い</small> 車 <small>くるま</small>	無	業
浪 <small>なみ</small> 反 <small>ひ</small> 段 <small>だん</small>	返 <small>かへ</small> 倒 <small>たひ</small> 中 <small>ちゆう</small> 體 <small>たい</small>	膝 <small>ひざ</small> 違 <small>ちが</small>
水 <small>みづ</small>	夕 <small>ゆふ</small> 打 <small>う</small> 力 <small>ちから</small>	胸 <small>むね</small> 邪 <small>よこしま</small>
入 <small>い</small>	立 <small>た</small> 碎 <small>くだ</small> 避 <small>よ</small>	車 <small>くるま</small> 入 <small>い</small>
柳 <small>りゅう</small>	瀧 <small>たき</small> 谷 <small>たに</small> 水 <small>みづ</small>	胸 <small>むね</small> 邪 <small>よこしま</small>
雪 <small>ゆき</small>	落 <small>お</small> 落 <small>お</small> 車 <small>くるま</small>	碎 <small>くだ</small> 碎 <small>くだ</small>
坂 <small>さか</small>	車 <small>くるま</small> 水 <small>みづ</small>	亂 <small>らん</small> 飛 <small>ひ</small> 龍 <small>りゅう</small>
落 <small>お</small>	倒 <small>たひ</small> 流 <small>りゅう</small>	刀 <small>や</small> 取 <small>とり</small>
		袖 <small>そで</small> 露 <small>つゆ</small>

天てん 卷ま 起おこ
 地ち 卷ま 倒たひ
 人ひと 卷ま

業之

拳部
流

拳流は圖解の如く



最初乙者甲者の胸襟を雙手にて

攔み直し右手は離し左手にて燃

ど握り夫れど同時し乙者は右の

足を尺半の後し引き退き(両者眼

を注ぎながら)甲は乙の左手押伸

筋(A十三番頂度脈筋に當る)を強

く握り甲右手をして乙の左手の回後筋(A十二番)を

折るゝや否や直し乙の後腰即ち腎中筋(A二十番)の

邊へ手を廻し甲者右足を以て力強く腎投となりて

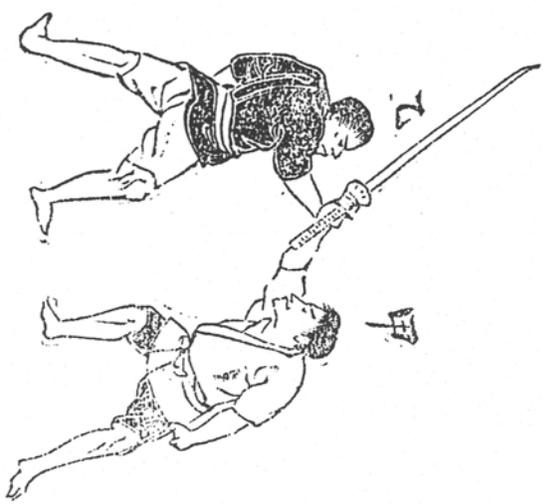
倒伏すべき手術を云ふ而して其の倒れたるや否や

手を離さず速かじ乙の左手を握り逆手取と爲し以

て敵の自由を伏くなり

車入

車入は甲者抜刀にて乙者の頭上に向て斬り掛らん
 とす(研究中は棒を携ふべし)其際乙は右手を以て直



乙の右足を掴み上げると同時に右足を突け力を極

めて肩上より前へ逆投と爲し速かに甲は以前ッ

カミシ手の儘逆手取と爲す術なり

注意し兼て自由を防ぐの術達人の法を行ふべし

膝車は始め乙者棒を腋に差して座

す時(棒は短刀を云ふ)不知不圖甲者

其の目前に進み来る...や否や乙は

右足を前に立て棒を揮て甲の頭上

に斬り掛らんとす其時甲は身を少

し枉め速かに乙の胸襟を双手にて

掴みタカエナカイニ捻じながら後



へ倒すなり(以前攔みし襟を離し乙者所持の短刀を奪取る手術に及ばず)其倒れたるや短刀を持し手の掌筋(B十五番)を握り逆手取となし再び前へ轉倒し即ち圖の如く(ウツムケ)に倒す事(乙の右手、手首、手腕)屈伸筋(B十二番)を握り乙者所持の短刀を奪取るの



術なり
胸 胸 碎
胸 碎 は 同 しく 乙 者 短 刀 を 腋 に 差 せし 儘 直 座 す 時 に 甲 は 乙 に 對 向 し 掛 聲 と 同 時 に 乙 の 短 刀 の ツカ の 所 即 ち 圖 の 如 く 右 手 に て 力 強 しく 握 り 其 儘 乙 の 膝 上 を 押 へ (動 か ざる 様) 他 の 左 手 を 以 て 胸 を 碎 く (以て碎くを) 拍子をして速かれ其手を後へ廻し力に乘し、て押し倒すなり、此

時短刀を離れず(後)短刀の両側

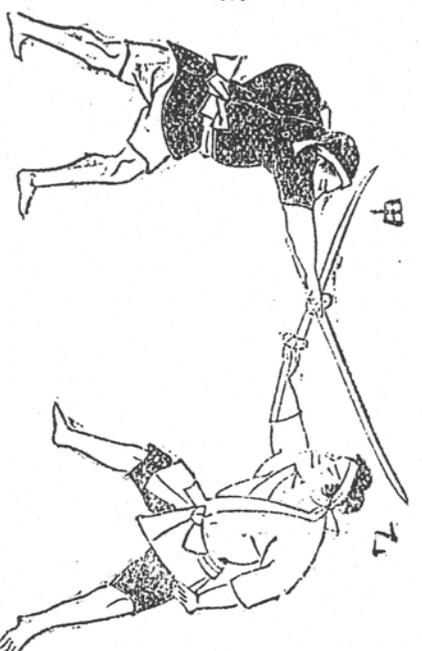
胸筋を縮むるの術なり

亂刀は兩者俱し劍を持て行ふ然

劍とす(研究中は棒の長短を用ふる

先づ(始め乙者甲に對向して

捷れ甲は長劍を以て之を受く(共



に眼を注ぎながら(直に右手にて乙の右の肘の處時

屈伸筋を攔み(B六番)此時左手に持ちし長劍を放棄

左手にて右手の攔みし上より乙の胸襟を掴み其

の儘後へ押し倒すなり、而して甲は乙の頭部を左膝

上へ枕とさせ(ウツムケ)に倒すなり

* 4 「武道は総合的なものであった」

長登師範は、この短い文中に二度も同じ言葉を使っている。武神館の門人ならば、この事実は体験的に解っていると思われるが、長登師範が当流だけでスポーツ武道を批判していると誤解されると困るので、老婆心ながら、他流においても「武芸は総合的なものであった」ことを、少し付け加えておきたい。

まず、日本で最も古く成立した柔術だと言われる（学術的・文献的に、最も古い時代までその流派の存在を確証できる）竹内流について述べたい。

竹内流は、腰の廻（小具足組討ち、要するに脇差や鎧通しなどを以て行う接近戦用武術）、羽手（拳法体術）、斎手（剣術）、捕縄（捕縛術）、活殺術（活法＝蘇生法と殺法＝急所を打つ打拳体術の組み合わせ）、居合術、棒術、薙刀術、手裏剣術、鎖鎌術等々、を含む総合武芸である。一般に竹内流が柔術と称されるのは、腰の廻、羽手と呼ばれる柔体術がすべての基本になっているからに過ぎない。この点は、戸隠流がすべての武器を含みながら、その基本を忍法体術においているのとまったく同様である。

次に、嘉納治五郎も修行した起倒流について述べる。

起倒流も、単に柔術だけでなく、鎧組討ち、棒、居合、陣鎌、弓術、槍術などを含む総合武芸である。このことは、犬上流体術や瀧心流小具足術などばかりでなく、剣術の雲広流や神武尺蠖流などまでが、起倒流の影響を受けたと言われるところからも明かであろう。

嘉納治五郎が修行したのは、滝野貞高門下の竹中鉄之助一清が興した、起倒流竹中派の柔術である。

続いて、大東流（合気柔術として知られる）や渋川流の元となった、関口流について述べる。

関口柔心^{うじま}を開祖とする関口流も、本来は、柔術・小具足・捕縄・剣術・居合・槍術・馬術などを含む総合武芸であった。これは、尾張に伝えられた関口流（小関口流と言われる）の中から、柔新心流居合術や尾州系抜刀術が生まれている事実によって、はっきりと確認できる。

一般に柔術の系統と捉えられている流派ばかりが続いたが、小太刀の流派と思われがちの中条流も、本来は総合武芸である。また、香取の剣の中興の祖と言われる飯篠長威斎が確立した香取神道流は、現在は薙刀の流派としての方が有名であるし、この流派からは榎原流槍術も出ている（ついでに言えば、薩摩の示現流も香取神道流の流れを汲む）。

以上、読者の皆さんと交流し、共に勉強する一助になることを願って、蛇足ながら編集部が補足しました。これが、読者の皆さんと編集部の、また世界中の仲間同士の、「武芸」「武術」「武道」に関する問答のきっかけになれば幸いです。

こうした問題について、読者の皆さんが研究したことや勉強したこと、あるいは仲間同士で議論したことなど、面白い話があれば、ぜひ編集部にもお知らせください。

棒術ビデオ撮影余話 (三題)

棒術撮影の時

長瀬 弘

平成五年四月四日、前日の夏を思わせるような暑さから一変、当日は冷たい北風が吹き、今にも雨が降り出しそうなどんよりとした空模様である。ちょうど咲き揃った桜の花も、寒さに震えているようだった。

ここは野田市郊外清水の原野、小高い岡の上に位置する人気のない寺社、お寺であろうか。その隣には今は使っていない広いゲートボールのコート。

そこで、初見先生率いる武神館のメンバーと、クエストの撮影スタッフが打ち合わせをしている。侍装束の集団と最新機器を操るスタッフのアンバランスが、過去と現代の時空を麻痺させる。

しかし、野口先生と岩田さんとの鎧組討ちからスタートした、迫力あるシーンで我に返る。当然である。太刀を構えた岩田さんが、野口先生の如意棒一撃で押しつぶされ、兜がひん曲がっている。一步間違えば大怪我をするところであった。九鬼神流棒術、私の体が震えているのは、今日の天気からくる寒さだけではない。これが武者震いというものであろうか。

延元元年^{*5}、足利尊氏公^{*6}のために後醍醐天皇^{*7}が花山院^{*8}に幽閉されている際、元祖薬師丸藏人隆真は、楠木正成^{*9}の一族を始め南朝の忠臣達と共に、天皇をお救い申し上げた。その時の姿、まさに鬼神のごとく、薙刀片手に大将は誰かと藏人が切り込んで行けば、雑兵は草行く如く倒されて行きました。しかし敵の大將もさるもの、藏人の薙刀「荒波」の切っ先を逆に斬り飛ばしました。

「したり」と藏人は戸隠流棒術逆九字の形にて奮戦、大将を打ち倒すところに楠木の軍勢が駆け付け、天皇を助けた。そしてこの時の功により、藏人は九鬼姓^{*10}を賜ったとのことです。

九鬼の字は正しくは上のノがなく、オニとは訓まずカミと訓み、九鬼をクカミと訓んだ。

私が思うに、鬼神のごとく表現されているので、鬼からノを取って（鬼から角と牙を取るという意味）カミと訓み、鬼＝神の使いであると表現したかったのではないであろうか。

さて、撮影は順調に進み、私がクエストの監督さんと初見先生の会話の中で聞かせていただいた話に、以下に述べるような、修行の参考になりそうな話が幾つかあります。

六尺棒の六とはすべての基本（奇本）である。例えば六法全書の六であり地水火空風識の世界を構成する六道の六であり、これは武道の極意でもあると言われます。

また宗家は、棒の基本は体術であり、棒は背骨で操り棒に振り回されてはいけない、棒を掌の中で強く握ってはいけない、とおっしゃいます。ダンスのパートナーのように、軽やかにステップして宙で踊らせて、自由に、繰り出し繰り引くと言うより遊泳させるような気持ちで、自分の体も同じく遊泳させるように、足も踏ん張らずに軽く跳び遊ぶように心掛けなさい、と教えます。

また、正しい突きを会得するために、柱に五寸釘をちょっと刺して、釘の頭に向かって棒で突く練習をなささいと言います。初めは外れることが多いでしょうが、柱に釘が刺さるまで練習をなささい、ということでしょう。

棒術の突き技を大事にすることから、極意の歌に「棒先で 虚空を突いて我が手先 手応えあれば 極意なりけり」とあるように、心を突くことも悟らなければいけないよ、と教えます。

よく痛いところを突かれたと言いますが、こんなところにも武道の教えが生きているのです。

撮影も奥伝の域に入ると、宗家の動きが一段と速くなる。瀬能先生と大栗先生は、宗家の動きが速すぎてとてもついていけないとあえいでいる……。

速いというよりも、次がどう変化してくるのかわからない。まさに受けるというよりも、触れ流す。そうしながら虚実につけ入り敵の出端をはねるというような、パワーなき霞の如き「棒体一如」の夢幻の妙実が繰り広げられている。

編集スタッフの後日談によると、宗家の動きはスローモーションで見較べても他のマーシャルアーツの動きより速く、普通は三〇コマぐらいで見られるが、宗家の場合は五〇コマは必要であると言う。

また、以前は朝早くから夜中までかかって、三十分のテープをやっと一本作

っていたのに対し、今回は午前十頃から午後三時頃で終了……五時間。
それでいて五十分の内容を収録したのは驚異的である。

あとで気が付いたのだが、撮影現場に使われたのは、お大師様のお寺であつた。あの超人的なパワーをもって人々を救った、空海の弘法大師もまた、天皇から贈られた諡である。

蔵人、空海そして宗家は、今まさに世界人類を救おうとしている。

なす技を 己が力と 人は言う

神の導く 身と知らずして



六尺棒術ビデオ撮影

菅 純一

物を持って動くことは非常に難しいものである。それが長かったり、重い物であればなおのことである。棒の遠心力や重さに負けてしまい、身を滅ぼすことになる。

今、ちまたではJリーグというプロサッカーが大はやりのようであるが、彼らのドリブルを見ていると、ボールが体から離れず、ボールと体が糸で結ばれているのではないかと思うときがある。

宗家は、棒体一致とよく言われる。今回発売になった六尺棒術のビデオを見ると、宗家の棒体一致の妙がよく解ると思う。まるで体の一部が棒の先まで延びているようである。

宗家の棒の受けをしていると、その棒に命を感じる時がある。棒の重さや、温もりさえも感じる時がある。

辛抱一貫の稽古から、神棒一貫への妙体へと体変する夢を見ながら。



棒術のビデオ撮り

大栗 紘一

桜の花も満開になった新緑の中、六尺棒のビデオ撮りが行われました。

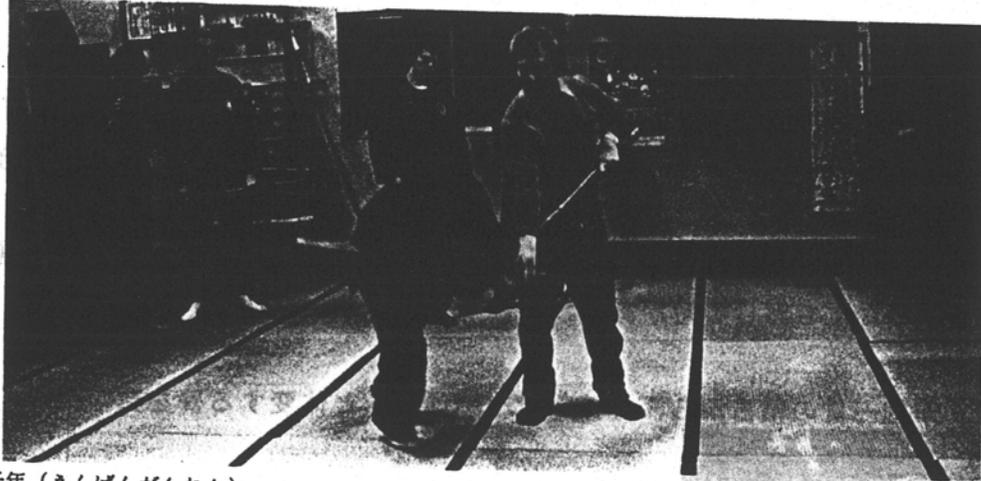
棒の種類や、その使い方から始まりました。まず一本の六尺棒という固定観念を捨て、太い棒もあれば細い棒もあり、重い棒もあれば軽い棒もあること等を、常に認識していなければならないのです。

そして、棒をどのように使うか、まず棒のまわし方から始まり、受けの基本動作や型へと進みました。棒の練習も、道場の中だけで型を練習していると、慣れ合いになってしまい、視界も狭まり、棒本来の持つ質や動きを見失ってしまうように感じました。

人間は、ただ目前にある棒の型を見るのではなく、その棒の型の中にある意味をも見るようにするのも、大切なのではないかと思った。棒の型だけを練習していると、どうしても棒を武器とする固定観念が働き、棒も身体の一部であることを忘れてしまうような気がします。

自然の中で伸び伸びと動いていると、棒術もまた体でさばき、いかにその棒を自由に使いこなさなければならぬかを痛切に感じました。

例えば、棒を持ち突く場合でも、棒を突き出すか、棒を持ったまま体で突くかによって、身体で感じる防護はまるで違うように感じます。身体で棒を突かれた時は、体の動きに気を取られるのか視界の中に棒が入って来なくて、棒の長さの目測が出来にくくなったりします。また、体をさばかれながら下から斜めに棒で打たれた時などは、視界に捉えることが出来ず、改めて棒の難しさを感じました。



*5 延元元年(えんげんがねん)

延元は日本の元号で、延元元年は西暦一三三六年に当たる。ただし、八月に即位した光明帝は、すぐに元号を建武に戻した。従って北朝の歴史では延元という元号はないに等しく、同年は建武三年に当たる。一方、吉野に逃れた後醍醐帝は、復位を宣し元号も延元に戻すと宣した。こうして南朝の歴史では、延元は五年(=興国元年)までであることになる。

* 6 足利尊氏 (あしかがたかうじ)

1305~1358。足利貞氏の子、清和源氏足利流の総領。室町幕府初代将軍。初名高氏。

弘元応元年 (1331年・元徳3年)、家督を相続。弘元の乱で、弘元三年 (1333年、正慶二年) に鎌倉幕府方の一方の大將として西上したが、丹波国篠村で幕府に叛旗を上げ、六波羅探題を攻め滅ぼした。これによって建武新政権から勲功第一とされ、参議従三位に除せられ、相模・伊豆を知行地として与えられ、武蔵守を授けられた。この際、御醍醐天皇の諱 (尊治) から一字をもらい受け、尊氏と改名した。

建武二年 (1335年)、北条時行の乱を鎮圧に鎌倉に下った際、武家政権の再興を企てて、新田義貞征伐を名目にして京に向かい、箱根竹ノ下で義貞の軍を破った後も、建武政権の意向を無視して西上を続けた。

翌建武三年 (1336年)、北畠顕家らに敗れ一時九州に退くも、筑前国多々良浜で菊池武敏の軍を破って勢力を挽回し、兵庫湊川で楠木正成を倒して再び入京、光明天皇を擁立し、建武式目を定めた。

暦応元年 (1338年、南朝では延元三年)、征夷大將軍となり、室町幕府を開いてからも南朝と戦い続けた。

観応元年 (1350年、南朝では正平五年) 頃より弟の直義と対立し、翌観応二年、窮地に陥り一時南朝に降るが、観応二年 (1351年、南朝では正平六年) の末、関東に下った直義を迫討し、駿河の蒲原、伊豆の国府、相模の早川尻で直義軍を破り、翌年一月に鎌倉で直義を下し、二月に毒殺した (「太平記」は、「死因は黄疸という発表だが、鳩毒を盛ったという噂だ」と伝える。現在多くの研究者は、噂の方が真実だと考えているようである)。

その後、中国・九州で勢力をふるう直冬 (直義の子) を討とうとしたが、延文三年 (1358年、南朝では正平十三年) に病没した。法号は等持院仁山妙義。

* 7 後醍醐天皇 (ごだいごてんのう)

1288~1339。在位1318~1339。後宇多天皇 (大覚寺党) の第二皇子。諱は尊治。鎌倉幕府を倒して建武中興を実現し、やがて南朝の祖となった天皇。

延慶元年 (1308年) に立太子し、文保二年 (1318年)、花園天皇 (持明院党) の譲位を受けて即位した。元亨元年 (1321年)、後宇多法皇の院政を退けて親政を開始し、吉田定房・北畠親房・万里小路宣房などを登用して記録所 (記録荘園券契所) を再興するなど、政治の改革に務めるかたわら、朱子学・武芸などにも励んだ。

即位後次第に鎌倉幕府打倒・王政復古の意志を抱くようになり、討幕の計画を練ったが、正中元年 (1324年)、六波羅の密偵によって幕府に計画を察知され、側近の多くが捕らえられた (正中の変)。

この時は危うく難を免れた後醍醐天皇は、再び討幕の計画を練ったが、元弘元年 (1331年、元徳三年)、吉田定房の密告によって幕府に知られたため、笠置山に逃れた。しかし今度は逃げきれずに捕らえられ、翌元弘二年 (1332年、元徳四年)、隠岐に流された (元弘の変)。

やがて各地に幕府に対する反抗が起きると、元弘三年 (1333年、正慶二年) に隠岐を脱出し、鎌倉幕府の滅亡直後に帰京して建武新政を開始した。

雑訴決断所・武者所などの機関を新設してそこに公家・武家の人材を登用し、紙幣を発行し皇居を造営するなど積極的な政策を実施した。しかし、恩賞の不公平や旧慣習の性急な破壊、公家中心の政治などのため、武家・農民層に不満が高まり、新政はうまく行かなかった。

この間、建武二年 (1335年) に足利尊氏が反乱を起こし、一度は撃退するものの翌年

年)には京を押さえられ、講和に応じた天皇は花山院に幽閉され、三種の神器を尊氏の擁立した光明天皇に差し出さざるを得なくなった。しかし同年末吉野に脱出し、京都の朝廷に対抗して南朝を建て、諸皇子を諸国に送って北朝・室町幕府に対する抗戦を続けた。

しかし南朝の勢力拡大は思うにまかせず、延元四年(1339年、暦応二年)病に倒れ、京都に戻る希望を果たせぬまま没した。帝は崩御の前日に、^{のりなが}義良親王(後村上天皇)に譲位している。

* 8 花山院(かざんいん)

^{ひがしちじょう}東一条殿、あるいは東院とも言う。元々は清和天皇の第四皇子、^{さだやすみのう}定保親王の邸で、近衛大路の南、東洞院の東、勘解油小路の北にあった(現在の京都御所建礼門と宗像神社の中間辺り)。

花山院の名の由来に関しては、撫子や萩の花が多かったためこの名が付いたとする説や、花山天皇が東院に住んでいた「九の御方」の元へ通い、やがてそこに住んだことから花山院と呼ばれるようになったとする説がある。冷泉天皇・後醍醐天皇も一時住居とした。応仁元年(1467年)八月、兵火のために焼失している。

* 9 楠木正成(くすのきまさじけ)

1294~1336。父は楠木^{まさき}正遠と伝わる。後醍醐天皇に従って活躍した南北朝時代の武将。幼名^{たけのみ}多門丸。

河内国観心寺領の土豪と言われるが、詳しくは判っていない。林家辰三郎氏は、楠木家は散所(荘園領主の雑役に奉仕する一種の賤民で、奉仕の代償として領主からある産物の独占権を与えられる例もあった)の長者的な武士ではなかったか、と言っている。また中村直勝氏は、楠木氏はおそらく^{しんし}辰砂(水銀鉱物で朱の原料)の独占権を握っていた土豪で、その利益が正成の資金源になっていたのではないかと述べている。

正成は、元弘元年(1331年、元徳三年)、後醍醐天皇の招きに応じて^{あかざかじょう}赤坂城で^{ゆきさじょうぶつ}挙兵して湯浅定弘の軍と戦い、赤坂城が落ちると奈良方面に逃れた。

翌元弘二年(1332年、正慶元年)の末、赤坂城を奪還してその奥に^{ちばせじょう}千早城を築き、そこに籠った。翌年、^{あそ}阿蘇治時・^{おさうげいとき}大仏家時らの幕府包囲軍と戦い、善戦して追討軍を釘付けにし、反幕府勢力結集の時間を稼ぎ、赤松氏らによる六波羅探題攻撃を有利に導いた。金剛山を包囲する軍勢が崩壊すると千早城を発して神戸に向かい、後醍醐天皇を迎えた。

建武政権樹立後、この功を認められて恩賞方・記録所の寄人に任じられ、雑訴決断所の奉行に任命された。さらに従五位下、河内守・摂津守に叙せられ、二条富小路に居を構えて天皇の身辺警護に当たった。

延元元年(1336年、北朝では建武三年)、西上してくる尊氏軍の^{はたけやまたかくに}畠山高国を宇治に迎え撃ち、続いて京の^{ただよ}糺の森で^{しげいよつね}斯波家経・^{はたけやまのくに}畠山高国・^{うすぎしげよし}上杉重能らの軍と戦ってこれを破り、尊氏が九州に退く決意をする一因を作った。

同年の尊氏東上に当たっては、軍議で戦術的撤退・遊撃戦論を献策するも入れられず、兵庫湊川に布陣して、足利直義の陸上軍と戦い、多くの郎党と共に最期は自刃して果てたという。



武神館東京道場 予定表 (平成5年後期)

年	月	月 MON	木 TEU	金 FRI
93	7	12 _B 26 _B		2 _A 9 _A 16 _A 23 _A 30 _B
	8	9 _B 23 _B 30 _B	12 _B 19 _B 26 _B	
	9	13 _B 27 _B		3 _A 10 _A 17 _A 24 _A
	10	25 _B		1 _A 8 _A 15 _A 22 _A
	11	8 _B 22 _B 29 _B	4 _B 11 _B 18 _B 25 _B	
	12	13 _B	9 _B 16 _B	

場所 東京武道館 TOKYO BUDOKAN ○ A: 入り口側半面
 東京都 足立区 綾瀬 3-20-1
 TEL (03) 5697-2111 稽古時間 19:00~20:30

交通 JR山手線「西日暮里」乗り換え
 JR YAMANOTE LINE 「NISHINIPPORI」STATION CHANGE
 地下鉄千代田線「綾瀬」駅下車徒歩5分
 (SUBWAY) CHIYODA LINE 「AYASE」STATION 5 MIN ON FOOT

武神館本部道場事務所
 宗家 初見良昭
 TEL (0471) 22-2020
 FAX (0471) 23-6227

武神館伝書 「山脈」 第二号

平成五年五月五日発行

発行者 初見 良昭

編集長 林 靖之

発行所 武神館道場本部

千葉県野田市野田636 〒278

Tel 0471(22)2020

Fax 0471(23)6227

許可なくして複製・転載を禁ず